

Title	在外「内地人」研究
Author(s)	高嶋, 朋子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49473">https://hdl.handle.net/11094/49473</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a>〉</a> をご参照ください。

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【4】

氏名	高嶋朋子
博士の専攻分野の名称	博士(学術)
学位記番号	第23239号
学位授与年月日	平成21年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学位論文名	在外「内地人」研究
論文審査委員	(主査) 教授 武田佐知子 (副査) 放送大学教授 西村 成雄 教授 平田 由美 教授 尾上新太郎 教授 高山 正樹

論文内容の要旨

本稿の目的は、明治・大正期において台湾に居住した「内地人」つまり「在内地人」の教育（主として初等教育）が抱えた問題をとらえながら、その教育の方針を明らかにすること、そして、そのことを通じて「在内地人」がどのような「日本人」であることを自らに課そうとしたのか、すなわち、彼らが目指すべき目標として想定した「日本人」が、どのような像を結んでいたのかを考察することにある。

内地から地理的に断絶された場で、異民族との接触を余儀なくされた外地在住「内地人」は、内地在住「内地人」とは背景を異にするマイノリティであり、必ずしもモデル的「内地人」と同一視できない存在と認識されよう。それ故に、内地から離れた外地に居住する「内地人」は、その土地の直接的支配者であると同時に、内地との差異を突きつけられ、自らが統合されるべき「日本人」像を設定せざるを得なかったと考えられるのである。こうして内地在住の「内地人」と外地在住の「内地人」の間の境界は明確化され、そこから「内地人」の多層性が示唆される。

本稿は、外地在住の「内地人」の間と内地在住「内地人」の間におかれた境界に目を向け、外地在住の「内地人」がその境界をどう認識し、越えようとしたのかをとらえたいと思う。それは、外地在住の「内地人」が目指すべき目標として想定した「日本人」像が、どのような姿であったのかを考察することと同義である。

各章の論題及び内容は以下の通りである。

第1章「転校の多発、気候による悪影響、「土化」—「在内地人」初等教育の問題とその変容」では、明治期から大正期にかけての「在内地人」初等教育が抱えていた問題（転校の多発、気候による影響、「土化」）と、その変容、そしてどのような方策がとられようとしたのかを、台湾教育会

機関誌の記事分析により明らかにした。第1章の分析結果を受け、「在内地人」初等教育の問題のうち2つが、大正期に入って新たな課題へと展開したことに着目し、それぞれ第2章・第3章で更に考察を深めた。まず第2章「台湾高等小学校による中等教育機関の補完と実業教育路線への変更—台湾に根付く「在内地人」の養成—」では、転校の多発という問題を発生させた「在内地人」の非定住性に抗するための、「在内地人」対象の実業教育機関設置の提案に手掛かりを得て、台湾高等小学校が実業教育重視へと改変された背景と意義について考察した。第3章「「在内地人」からみる初等教育における内台共学—条件の設定と「在内地人」教育関係者の認識を中心に—」では、「土化」問題の変容と関連したと考えられる「内地人」と「本島人」の初等教育における共学の過程を検証しつつ、その内台共学を「在内地人」教育の側からとらえた。最後に、第4章「目指すべき「日本人」像の揺らぎ—「在内地人」教育をめぐる見解」では、前章までで考察してきた「在内地人」教育の問題を踏まえて、「在内地人」教育の方針が、教育関係者の間でどのような議論に結びついたのかを検証し、特に、「在内地人」教育が目指す目標として設定された「日本人」像に注目して、明治期から大正期にかけての「在内地人」教育の揺れ動く様をとらえた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、明治・大正期の台湾に居住した内地人(在内地人)初等教育を中心とした教育現場の言説分析を行い、外地に在住した内地人が、国民国家体制内への自らの位置付けと、帝国建設における自らの役割とを、どのように認識していたのかをとらえようとした。

そもそも、外地在住の内地人を考える時、支配する異民族との相克が常に意識される反面、内地在住の内地人との差異に着目されることは非常に少なかったと言えよう。内地人内の非統一性を取り扱うこと自体は、例えば、ジェンダーや部落問題を考える上で既に意識されているように、特に目新しいものではない。しかしながら、国民国家の外縁であり帝国の一部である植民地に居住した内地人への注視という意味では、極めて新しい着眼点を持った研究である。

本論文の核となる第1章・第4章では、台湾の教育雑誌に掲載された関係記事の言説分析を行った。台湾の内地人教育の大枠は内地制度に依るものであるため、制度分析だけではその内実を把握することが困難である。既存の研究では、在内地人教育が内地制度の移行であるという確認がなされるにとどまるが、本論文では、在内地人教育の実相に迫るため、現場の教師達を含めた教育関係者の言説を重要視した。当時書き記された現場の人間の声を蒐集して分析を加えることは、聞き取り調査ではアプローチが不可能である明治期・大正前期の教育現場の状況をより詳細把握するために、有効且つ説得的手法であるといえる。

第1章で提示された在内地人教育現場の問題は、すべからく内地との差異に端を発している。統治初期から時代が進むにつれ、個々の問題への対策や問題自体の形に変化があっても、問い続けられる内地との差異は根底に存在し続け、解消されることはない。そこに、国民国家としての「均質性」の内に自らを位置付けようとして揺れ続ける在内地人を見出している。また、膨張を続ける帝国の新たな外地獲得・整備によって、内地との差異だけでなく、他外地に居住する内地人の存在を意識せざるを得なくなる。第4章後半部では、内地との差異を埋めることができないまま、帝国拡大の突端に居る発展性という自負も他外地の存在によって固有性を失ったことが指摘されている。本論文は、極めて徹底的な分析によって、内地との差異、朝鮮をはじめとする他外地への意識、台湾土着社会との折り合いといった要素が強力に絡み合っており、国民国家体制と帝国主義の間で揺れる不安定さを保持し続けた在内地人の姿を描き出すことに成功している。

しかし、いまだ充分でない点も多い。例えば具体的に指摘するなら、同時期の国民国家体制下で進められた内地の教育、そして朝鮮をはじめとする他外地の教育について、具体的提示がなされていない。本論文ではあくまでも、在内地人教育関係者の言説のなかから見えてくる内地との差異、他外地への意識という問題が指摘されている。内地との差異については、同時期の内地における教育のねらいを明確にし、それが在内地人教育とどう関連してくるのかといった点まで踏み込む必要がある。そして、他外地の内地人教育関係者は、自身の居住地以外の外地をどう見ていたのかということを含め、各外地の内地人教育との比較検討がなされるべきであろう。台湾という限定された地域に即した問題を、そのまま他の地域に移行して考えることは不可能である。当時の台湾の位置を規定した上で、内地・他外地の状況との突き合

わせが行われる必要がある。これらの問題は総じて言えば、理論的フレームワークに関わる検討作業の不十分さが原因であり、今後の大きな課題として残されている。

また、対象史料についても言及しておきたい。現存史料の限界などの影響を否定はしないが、教育分野以外の幅広い媒体を対象にすることもできるのではないか。そもそも、在内地人に着目して国民国家内の非統一性を考えようとする本論文のテーマによれば、教育分野へのアプローチだけでは不十分とも言える。在内地人教育という対象のみに絞ったことで、史料分析の精度は非常に高いが、上記した点と併せてやや近視眼的であるという点は否めない。他分野の雑誌や新聞を付き合わせて、本論文を補強していくことは決して難しくはないはずである。

以上のように研究対象の狭さについて指摘したが、教育分野にこだわった個別実証的点については、在内地人教育研究の先駆として評価できる。第2章で取り上げた台湾高等小学校改変の背景、そして第3章で扱った内台共学問題は両者共に、第1章で見出した在内地人教育上の問題点のなかから、発展的に取り上げた論題である。

まず、第2章の台湾高等小学校改変については、先行研究は皆無であり、本論文がその端緒をひらいたものと言える。台湾高等小学校は、内地人対象の中等教育機関の補完として、実質的に台湾で初めての内地人実業教育機関に改変された。この改変が、在内地人の非定住性という問題を背景に、台湾へ定住する内地人児童を養成する役割も担ったことを明らかにした。台湾高等小学校の卒業者の動向についての統計が存在しないため、その成果を判じることは不可能であるが、内地の高等小学校改変との時期のずれに対する指摘などは、非常に興味深い。

そして第3章で扱った内台共学は、その成立過程について多くの先行研究が存在している。それら先行研究の対象は常に被統治者であったが、本論文は、被統治者を受け入れる側であった在内地人教育の側面から、内台共学を再考している点が意義深い。これまで、受け入れ側の在内地人教育関係者の意見や態度を探るものは散見されなかったのである。本論文の分析によれば、在内地人教育関係者の内台共学に対する見解は統一的でない。積極的協力姿勢はとらないケースも、その真逆の態度も見受けられるのである。それは逆に言えば、内台共学への態勢が整っていなかったということであり、積極的に活動して内台共学に協力しようという意識を持たない関係者が存在したことが示された。本論文では、明治期から問題視されてきた「土化」（異民族との言語・文化接触によって、児童の言語や生活、精神性に影響が及ぶこと）と在内地人研究者の反応を関連づけている。この「土化」問題は、台湾社会という、圧倒的多数者である現地民のなかに居住する在内地人の存在を考える上で、非常に興味深い視点といえる。本章において、既存の研究が見落としてきた在内地人教育関係者の内台共学への反応を明らかにするという目的は十分に果たされている。しかし今後の課題として、この「土化」問題を更に掘り下げていくことを期待したい。

上述のように、本論文の課題は教育分野からのアプローチだけで完結させることは難しい。しかし、在内地人教育上の問題を丹念に拾い上げ、個別研究を重ねたことによって、今後、研究課題を拡大し、遂行していく上で必要な枠組みと方向性は、明確に形作られていると言える。

以上のように、積み残された課題は多いが、本論文の切り口はユニークであり、史料分析・検討の意義がそこなわれるものではない。そして、いまだ示唆的ではあるが、外地に居住した内地人研究に取り組む端緒を開いたものとして高く評価でき、史料分析の緻密さを以てすれば、今後、研究課題を大きく展開していく期待が持てる。よって、本論文を博士（学術）の学位にふさわしいものと認定する。